

卑弥呼 祭祀の舞台か

奈良・纏向遺跡から柱穴100超

邪馬台国の最有力候補地とされる奈良県桜井市の纏向遺跡で、女王・卑弥呼が君臨した時期にあたる3世紀前半の小型建物の柱穴が100個以上見つかり、市教委が1日、発表した。約60平方メートルの狭いエリアに集中し、小型建物を建てたり壊したりした跡とみられる。遺跡の中心部で柱穴が集中して確認されたのは初めてで、専門家は「年に数回、卑弥呼が特別に執り行った祭祀用の建物跡ではないか」とみている。

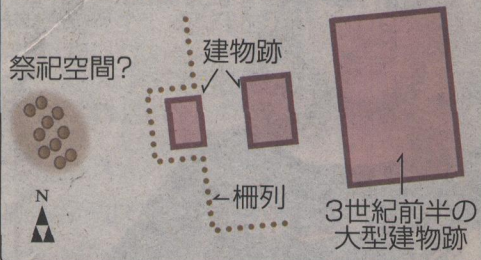


豪族居館の周濠跡も出土

市教委は過去の調査を踏まえ、遺跡の中心部は、卑弥呼の宮殿とも指摘される3世紀前半の大型建物を含む4棟の建物が東西に並んでいたと推定。今回、昭和53年に柱穴の一部が確認されていた最も西側の建物の



纏向遺跡の建物位置関係



纏向遺跡中心部の西側エリアで見つかった小型建物の柱穴
 〓 奈良県桜井市

推定地を調査し、この建物に関連する柱穴は確認されなかったが、周辺で直径10〜60センチの柱穴を100個以上確認した。

市教委によると、建物群の入り口にあたると思われる、「特別な空間」として利用された可能性が高いという。古代祭祀に詳しい辰巳和弘・元同志社大教授（古代学）は「卑弥呼が年に数回、食物の収穫を感謝する祭祀のたびに建てられ、祭祀後に取り壊された複数の小型建物の痕跡ではないか」と推測している。

一方、今回の調査では、4世紀中頃に整備された豪族居館の周濠跡の一部も確認された。過去の調査を踏まえ、周濠の規模は東西約65メートル、南北約54メートル、幅は最大5・8メートル以上、深さ最大60センチ以上と判明した。市教委は「3世紀の宮殿エリアを囲むような周濠で、この周辺のエリアが、世紀をまたいで政治や祭祀の神聖な土地として利用されていたのではないかとみている。

現地説明会は3日午前10時から。JR桜井線巻向駅の西方徒歩約5分。